

台湾内政、日台関係をめぐる動向（2013年11月上旬-2014年2月上旬）

統一地方選に向けた動き、 日台間で5項目の実務協力取り決めが署名（前編）

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

統一地方選挙まで1年を切り、国民党、民進党双方で候補者選びが進んだ。選挙まで1年の段階の各世論調査では、国民党苦戦必至の情勢となっている。馬総統は元日の祝辞で、全国民に経済振興を訴えた。日台間で5項目の実務協力取り決め文書が署名された。日台間で尖閣諸島周辺海域での漁業操業ルールに関する会合が開催され、一部合意された。

1. 統一地方選挙に向けた動き

（1）次期統一地方選挙の投開票日が確定

公職選挙事務の主管機関である中央選挙委員会 は1月21日に会議を開催し、直轄市6市を含む県市長及び県市議員選挙を11月29日に行なうと発表した。

（2）国民党の動向

馬総統の施政満足度が低迷し、苦戦が予測される国民党は12月から候補者公認作業に着手した。12月4日に同党中央常務委員会は、国民党が現職を務める新竹市、台東県、金門県のほか、奪回を目指す雲林県の候補を公認した。

同党は1月22日に第二回目の公認作業を行い、高雄市長に召集（徴召）の形で現政務委員で元高雄県長の楊秋興氏を選出したほか、基隆市、南投県の候補には、党内予備選を経て市議会議長、立法委員が選出された。

（3）民進党の動向

11月20日、民進党は第15期第7次中央執行委

員会を開催し、第一次県市長公認候補リストを採択した。現職県市長の高雄市、台南市、嘉義県、宜蘭県のほか、雲林県、屏東県、南投県の候補は電話による世論調査を通じて決定された。同日蘇貞昌主席は記者会見で「6直轄市で3市（現有2市）、他県市は過半数の8県市（現有6県市）での勝利を目標とし、同時に投開票される県市議員、郷鎮長などは議席増を狙う」と強調した。

同党は1月15日、第15期第8次中央執行委員会を開催し、第二次県市長候補を公表した。今委員会では彰化県、新北市、台中市長候補のほか、複数の県市議員の公認候補を決定した。今回公認された3市は、現在いずれも国民党籍の首長であるが、蘇主席は記者会見で「非常に重要な選挙区である」と強調し、勝利への強い意志を示した。

2. 『聯合報』等による直轄市長選挙に関する世論調査

次期統一地方選挙まで1年を切った12月下旬に『聯合報』は、2014年12月に直轄市に昇格予定の桃園市を含む直轄6都市の市長選挙にかかる世論調査を行った。2月上旬現在、国民党、民進党ともに一部の選挙区で正式な公認候補は選出されておらず、多少の変化はありうるが現段階の両党の情勢を知ることができるので紹介する。

国民党は、新北、桃園でかなり優勢、民進党は台南、高雄でかなり優勢、台北は拮抗、台中は民進党がやや優勢となっている。

(1) 台北市長選挙

李登輝（当時は公選）、陳水扁、馬英九と民選選出の歴代総統が務めた台北市長は、総統の座を狙う者にとって極めて重要なポストであり、台湾世論において最も注目される選挙である。その一方で、日本の首都である東京都知事選挙が無党派層の行方が選挙を左右するのと比べると、「外省籍、軍人、公務員、教員人口の比率が高い」台北市は藍軍が緑軍を圧倒する「分かりやすい」選挙区である。1994年の選挙では藍軍陣営の分裂が陳水扁に漁夫の利をもたらし、4割弱の得票率で当選したが、しかし再選を目指した1998年の選挙では「陳市長」の施政満足度は高かったものの、国民党候補の馬英九に敗れた。またその後3度の台北市長選挙では、国民党候補がいずれも圧勝している。したがって、有権者の構造上、国民党は分裂しない限り優勢な選挙区である。

1月下旬の段階で国民、民進両党ともに、正式な候補を選出してないものの、国民党は連戦元副総統子息の連勝文中央委員のほか、現職立法委員、台北市議が出馬を表明している。連氏は、1月4日のマスコミ関係者との懇談で、2010年の選挙活動における銃撃事件で重傷を負った過去を回顧するとともに、「3年間に300件以上の脅迫を受けており、出馬に際しては自身と家族の安全が最大の考慮となる」と語りながらも出馬を否定しなかったことから、台湾メディアは「近々出馬宣言か」と報じた。緑陣営では、民進党員では呂秀蓮元副総統、弁護士の顧立雄氏のほか、非党員で台

湾大学病院医師の柯文哲氏が出馬表明をしている。

『聯合報』が、12月23日に公表した結果は、藍軍陣営の有力者の中では連勝文が36.9%の支持率を獲得し、現職立法委員の丁守中16.5%、蔡正元6.0%を大きくリードした。一方、緑軍陣営は非党員で政治的経験の無い柯医師が47.5%を獲得し、呂元副総統15.3%、顧弁護士11.3%を圧倒した結果となった。

これらの結果を踏まえて、同紙が両陣営の有力候補の対決を仮定し、連勝文と柯文哲が対決した場合の調査は、連が柯を僅か3%リードしたが、連と呂、顧候補との調査では連が30%以上リードする結果となった。（表1）

他機関の世論調査では、柯が連をリードしているものもあり、連柯両氏の支持率は、拮抗状態にある。柯氏は、無所属候補として出馬することで反馬英九、反国民党勢力を統合し、民進党の実質的な支持を受けることで選挙を有利に進めることを望んでいるが、民進党内には非党員の柯氏を党内候補選出のプロセスに組み込むべきか否かについて意見がまとまっておらず、蘇主席も世論の動向を参考にしつつも難しい選択を迫られており、党内調整が混乱する恐れも指摘されている。

(2) 新北市長選挙

12月24日に公表された結果は、現職の朱立倫市長が游錫堃元行政院長を30%以上もリードするものとなった。その一方で、朱市長は党内にお

表1 2014台北市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率		候補者と支持率	
連勝文 (国)	41	連勝文 (国)	56	連勝文 (国)	57
柯文哲 (無)	38	呂秀蓮 (民)	20	顧立雄 (民)	19
いずれも支持せず	7	いずれも支持せず	12	いずれも支持せず	11
未決定	14	未決定	11	未決定	12

資料元：「2014台北市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月23日）頁1

表2 2014 新北市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
朱立倫 (国)	58	侯友宜 (国)	44
游錫堃 (民)	19	游錫堃 (民)	29
いずれも支持せず	7	いずれも支持せず	9
未決定	16	未決定	18

資料元：「2014 新北市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月24日）頁1

いてもポスト馬總統の有力候補であり、2016年の總統選挙への出馬を模索しているため、次期新北市長選挙に出馬しない可能性も指摘されており、朱市長は自身の後継者として元警政署長（警察庁長官に相当）で2010年から副市長を務める侯友宜氏に禅譲する可能性が指摘されている。同紙は右事情をふまえ、侯副市長 VS 游元院長の調査も同時に行ったが同調査でも侯副市長が游元院長を15%リードする結果となり、同市における国民党の優勢が明白となった。（表2）

右結果を受けて、同紙は、朱市長の再選は有力であるが、侯副市長が出馬しても国民党は勝利が見通せるころ、朱氏が市長再選を目指すか直接總統選挙に挑戦するかの選択の幅は広がったと分析した。

2010年の選挙で民進黨は当時主席の蔡英文が朱氏に挑み惜敗したが、今回の選挙では基層支持者から期待された蔡英文、蘇主席が出馬を見送っており、民進黨の同市における不戦敗の可能性を嘆く声も聞かれている。

（3）台中市長選挙

2010年は台中市初の直轄市長選挙で、民進黨は蘇嘉全元内政部長が現職の胡志強市長に得票数で3万票まで迫る善戦をし、国民党に冷や汗をかかせたが、次期選挙でも接戦が予測される。

胡市長は民進黨権時代から国民党の将来を担うリーダーとして馬總統、朱新北市長とともに「馬

立強」と呼称されたよう、同氏の動向は注目を集めている。旧台中市と現直轄市を含めると3期連続で市長を務める胡氏は、春節前まで再出馬を明言せず、後継者には、現前職副市長、現職立法委員が出馬の意向を示していたが、いずれも支持率は低く、国民党中央は胡市長に対し再出馬を再三要請している等の報道が多数されてきたが、紆余曲折を経て春節明けの初出勤日となった2月5日に同氏は正式に出馬宣言を行なった。

一方、民進黨は現職立法委員の林佳龍と蔡其昌が激しい予備選を展開したが、その最中に実施された『聯合報』の調査では、支持率比較では林が蔡を大幅にリードし、右を踏まえて行った林 VS 胡の支持率調査では林が胡を6%リードした結果となった。なお、胡 VS 蔡の調査では胡が蔡を12%リードする結果となった。（表3）

その後、民進黨は党内予備選を行い、林が勝利し、公認候補に内定した。なお、林は2005年にも現職の胡市長に挑戦したが大敗しており、今回は再挑戦となるが、林委員は党内有力派閥新潮流派のホープである蔡委員と激しい予備選を展開したことから、民進黨が勝利するには、党内の団結が鍵になるとの指摘もされている。

（4）台南市長選挙

12月26日に公表された台南市長選挙の支持率調査は、民進黨籍で現職の頼清徳市長が国民党の想定候補に対し60%以上の支持率を獲得し、圧倒

表3 2014 台中市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
胡志強 (国)	36	胡志強 (国)	45
林佳龍 (民)	42	蔡其昌 (民)	33
いずれも支持せず	7	いずれも支持せず	8
未決定	15	未決定	15

資料元：「2014 台中市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月25日）頁1

的なリードを保ち「敵がない」と揶揄される結果となった。同調査では、頼市長の支持は藍軍支持層にも広まっており、磐石の態勢に近い様相となっている。

台南市は1997年以降、民進党候補が連続当選しており、陳水扁前総統の出身地でもある旧台南県長に限れば、1993年から民進党候補が連勝しており、緑陣営が優勢な選挙区であり、頼市長の施政満足度も高く、死角はないように見える。一方、国民党陣営は有力な候補がおらず、「不戦敗」の様相が濃く、『聯合報』は吳清基元教育部長、謝龍介台南市議との対決を想定して調査したが、いずれも大差をつけられる結果となっており、候補者選びは難航している。

表4 2014 台南市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
頼清徳 (民)	62	頼清徳 (民)	64
吳清基 (民)	15	謝龍介 (国)	13
いずれも支持せず	4	いずれも支持せず	4
未決定	20	未決定	19

資料元：「2014 台南市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月26日）頁1

（5）高雄市長選挙

12月27日に公表された高雄市長選挙の世論調査の結果は、現職の陳菊市長が現政務委員の楊秋興を大幅リードする結果となった。陳市長は、旧高雄市長、旧高雄縣市合併後の市長を各1期務めているが、同人の施政に対して、72%が満足と回答しており、国民党系支持者にも支持を広げており、圧倒的な優勢にあることが明らかになった。

国民党は、元高雄県長で2010年の選挙で陳市長に挑戦し惜敗し、民進党を離党し、政権交代後に国民党に入党した楊氏の推薦を決定したが、苦戦必至の情勢である。

表5 2014 高雄市長選挙支持度調査

候補者と支持率	
陳 菊 (民)	56
楊秋興 (国)	20
いずれも支持せず	4
未決定	20

資料元：「2014 高雄市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月27日）頁1

（6）桃園市長選挙関連

現在の桃園県は、人口204万人（2013年12月統計）で台湾最大の人口を有する県であり、2014年12月に直轄市に昇格予定である。12月28日に公表された桃園市長選挙の支持率調査では、現職の吳志揚県長が民進党の想定候補2人、彭紹瑾元立法委員、鄭文燦元新聞局長に対して10%以上のリードを保つ結果となった。

桃園県は本省、外省、客家、原住民の台湾を代表する4族群が融合する地域であるが、選挙では、戒嚴令時代に許信良元民進党主席が1977年に無所属候補として国民党候補に勝利した以外は、呂元副総統が、現職県長の殺害により実施された1997年の補欠選挙を含め2度勝利しただけで国民党が圧倒的な強さを誇る地域である。民進党候補は、2月上旬段階で公認候補が確定していないものの苦戦は必至である。

表6 2014 桃園市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
吳志揚 (国)	44	吳志揚 (国)	44
彭紹瑾 (民)	29	鄭文燦 (民)	27
いずれも支持せず	5	いずれも支持せず	6
未決定	22	未決定	23

資料元：「2014 桃園市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月28日）頁1

（前編終わり。次号に続く）